

## 第5分科会 難聴・言語障がいのある児童生徒への指導

### テーマ 「教育的ニーズに応じた難聴・言語障がいのある児童生徒への指導」

#### 提案Ⅰ 「経験することの大切さ」

発表者	高知県 香美市立鏡野中学校	教諭	堀内 望
司会者	高知県 室戸市立吉良川中学校	教諭	川島 京子
助言者	岡山県立岡山聾学校	副校長	高見 晴寿

## I 実践に当たって

- 1 本校は、各学年4クラス、特別支援学級4クラスの計16クラスである。本生徒(以下Aさん)は1年生で難聴学級に在籍し、交流及び共同学習を行っている。
- 2 本生徒は、右耳は軽度難聴で、左耳は重度難聴である。感音性の難聴である。高音が聞こえにくい。定期的に検査を行っている。右耳に補聴器を付けていた。本生徒は明るく、友達に好かれている。班会での話合いや挙手での発表や音読、英語のペア学習等も臆することなくできている。

## II 実践内容

### Ⅰ 日頃の実践

#### (1) 目標

目標は、日頃のコミュニケーションで人と関わる力を付けることとした。具体的には、聞こえにくい時に、もう一度言ってもらったり、友達に臆することなく聞くことができたり、といったことができるようになるよう話をした。観察していると、聞こえていないとき、聞き漏らしたときもあったようだが、他の生徒の行動を見て対応することが多いようだった。聞き漏らしたときのコミュニケーションを取る機会が少なく、そういう意味では少し残念であった。休み時間には、他の生徒とのコミュニケーションは多く、通常のコミュニケーションは問題がないようである。令和2年9月から補聴器を外すことが多くなった。理由は、補聴器で増幅された音が、本生徒にとっては不快であり、補聴器をしていない右耳でもほぼ支障なく聞こえるからである。

#### (2) 日頃の実践

日頃の実践として行ったことは次のとおりである。英語の授業での発音の場面で、正しい発音ができていることがあった。また国語の教科書の音読でも少し同じようなことがあった。そこで英語の教科書の、単語の音読を行った。コロナ禍ということもあり、距離をとって教員はマウスガードをして、できるだけ口元が見えるようにした。特定の音が聞こえにくいようであったが、何度か正しい発音を練習するとできるようになった。英語の発音練習でも、ペアで臆することなく発音することができ、感心した。

### (3) 体調の管理

部活動が本格的に始まった1学期中頃、朝練習が行われるようになり、眠そうにすることが増えた。保護者に相談すると「元々体力がある方ではなかった。体力が落ちてくると耳が聞こえにくくなるので、体調が思わしくない。眠そうな場合には朝練習を休ませてほしい」という要望だったので、部活動顧問と相談して、体力が付いてくるまでは、朝練習を休むこととした。2学期になり、朝練習をしても眠くなることがなくなり、他の生徒と同じように活動できるようになった。夏休みの間の部活動で、体力が付いたようであり、身体も引き締まっていた。

運動部の活動では、聞こえてくる音で判断する部分も大きいので心配していたが、競技には問題なく取り組んでいるようである。顧問や部員へは、本生徒に話す時は、右側から話し掛けてほしいとお願いした。また、本生徒には、話を聞く時には、自分から聞こえやすい位置に立つよう話をした。

## 2 自立活動での取組

本生徒に必要なことは何だろうと悩んだ。交流学級の授業では、聞こえないことによる困り感はほとんどないようである。この先に困ることは何だろうかと考えたときに、進学や就職のことが浮かんだ。本人と保護者に中学校卒業後の希望を聞くと高等学校への進学だと言う。今のままでいくと、高等学校でも中学校とほぼ同じように過ごせるのではないかと思うが、いろいろな中学校から集まった生徒たちとのコミュニケーションの中で、困ることも出てくるかもしれない。そこで、意思の疎通がうまくいかない場合に、どうやって分かってもらうかの授業を行った。自分の左耳が聞こえにくいことと、もう一度言ってほしいことをお願いすることをどう伝えるか、ワークシートを使って考えてさせた。ロールプレイングを行って、実際にやってみた。私とではスムーズに行うことができたが、実際の場面ではどうだろうか。

また、「難聴の人は、どう自分の仕事を見付けるとよい？経験することの大事さと私の経験」という授業を行った。インターネットの動画サイトで、自身にも難聴のある補聴器販売員が、どうやってアルバイトや就職をしたか、また働いているときに耳が聞こえにくいことによるトラブルをどう対処したのか、という話の場面があった。そこで、その補聴器販売員さんに連絡を取り、動画を授業で使用する許可を得た。

まずワークシートで、本生徒が知っている仕事から、興味のある仕事について考えさせた。次に難聴の人がやりやすい、やりにくい仕事は何か考えさせた。めあてとして「難聴の人は、どう自分の仕事を見付けるとよいだろうか」とした。難聴の人に向いている仕事を探して選ぶと発想しがちであるが、動画の中では「いろんな職業で体験をしてみることが大切」「職業上の問題もあるが、それ以上に職場の人間関係についても難しさがある」と話していた。また「アルバイトをしたときに、上司に耳の事情を話し、職場の同僚にも一定の理解が得られた場合もあったが、別の職場では上司に話しても理解が得られず、耳の事情によってトラブルが起こったときには自己責任となり、その職場を辞めざるを得なくなった」と語っ

ていた。

本生徒はワークシートに、周りの人に理解をしてもらえよう自分の事情を話すことや、話しても理解を得られない場合があること、経験が大切であることを書いていたので、一定の理解はできているようだった。しかし、経験してみないと実感は湧かないと思う。

### Ⅲ 成果と今後の課題

#### 1 日頃を取組を振り返って

本生徒は、右耳の状態もある程度良好である。優しい人柄ということもあって、休み時間は友達が絶え間なく寄ってきて、輪ができていく。周りの生徒も本生徒の耳の事情を分かっており、授業や休み時間といった学校生活で困ることはほとんどない。時には、友達とのトラブルや、宿題を忘れることもあるが、それは他の生徒と同じように指導している。

今後の課題は、自分の今の気持ちや体調などを自分から言うことができるようにすることである。ついこちらから「体調が悪いんじゃない？」と聞いてしまうことが多く、言わなくても周りが察してくれる状態になってしまっている。まずは本人の口から言えるようにさせたい。

#### 2 自立活動を振り返って

自立活動については、学んだことは理解している。実践の機会は少ないが、高等学校入学試験の面接や、入学後の生活、就職等で少しでも役に立てばと思う。そのためにも、今後はどんな自立活動の授業を行うことが効果的かを勉強していきたい。

#### 〈指導・助言〉

本実践に関わる難聴の生徒に効果的なカリキュラムや教材、指導方法の視点から指導助言を行いたい。

効果的なカリキュラムや教材、指導方法については、難聴に限らず、特別な教育的ニーズを有する生徒は実態が一人一人異なるため、一般化されたカリキュラム等を作成するのは難しい。従来から言われていることだが、対象生徒の実態を丁寧に把握した上で課題を明らかにし、具体的な指導内容を設定する「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」の作成こそが、その生徒にとっての効果的なカリキュラムとなる。また、作成された個別の指導計画を、「計画（Plan）－実践（Do）－評価（Check）－改善（Action）」のサイクルで取り組むことで、より一層効果的なものとなる。

なお、難聴児の個別の指導計画の作成に当たっては、特別支援学校（聴覚障害）の指導実践を踏まえ、4つの観点（①聴覚活用、②コミュニケーションや言語、③発音・発語、④障害認識）から整理すると、実態把握や指導目標の設定、具体的な指導内容の選定、指導の評価など、効果的なカリキュラム作成につなげることができる。

上記を前提とした上で、今日、障がいのある子供たちが将来社会で主体性をもって生活していくためにはセルフアドボカシーに関する指導の重要性が言われている。